

前の医書や著者名の引用回数率は高い。

以上のように、『保嬰三方』には記載の順序にもそれまでの医書にみられない新しさがあり、処方数も各門に三つと定めるなど実践的な面が多い。自ら古方派と称するにしては古い医書の引用は少なく、『傷寒論』の処方の引用も少ないが、その処方内容はそれまでになく大黄の入った処方を多く記載しており、東洞の出現を予想せしめるものがある。吉益東洞は日本独特の医学をつくり上げたことで評価すべきであるが、その独創性の芽生えはこの時代にもみられたのではないだろうか。

(擘小兒科内科)

黄会友の「神仙秘法」について

——高嶺徳明、伊佐敷道与の

秘術に関連して——

松 木 明 知

1

演者はこれまで高嶺徳明によって琉球に伝えられ、さらに島津藩医伊佐敷道与によって鹿児島に伝播された、福州の黄会友の秘伝の医術について、主として麻醉科学の立場から研究を行ってきた。

これは徳明の伝えた秘伝の一部は全身麻酔であろうという推定に基づいており、高嶺家に伝えられた口伝「痛くないようにして手術を行った」とされているからである。

しかし手懸りとなる史料が殆ど失われていたため、この本態に関しては知られるところがなかった。

朝日新聞全国版に報じられた演者の記事が機縁となつて、鹿児島県川内市の川内市歴史資料館において、右の黄

会友の秘術を伝える資料が二百四十年振りに発見され、その中に披見される処方などの解明が演者に求められた。演者はちょうど沖繩県医師会からの依頼で、高嶺徳明の伝記を執筆中であるが、今回発見された秘伝書の一部を紹介したい。

2

「神仙秘法」と題された秘伝書は幅一八センチ、長さ二七五センチの巻物であり、東京在住のある島津藩医の子孫の方から川内市歴史資料館に寄贈された胴乱の中から発見された。種々の事由のため、この島津藩医の名も子孫の方の名前、また胴乱も一切外部に公表されていない。

「神仙秘法」は大別して三つの部分より成っている。

一は黄会友の秘伝の処方と手術法、手術時の祈りの文句、高嶺徳明が黄会友から伝授された経緯、徳明から島津藩医伊佐敷道与への伝授について記された部分で是永安貞、永井円長の署名がある。全体の三分の二を占める。この中とくに重要な処方左の通りである。

○琥珀 五分 ○珍珠 五分 ○血蝎 壹兩但拾目壹兩
○赤石脂 一兩 ○氷片 壹錢 ○襲骨 壹兩
○児茶 八錢 ○乳香 一兩用竹葉盛菜去油 ○没藥 一兩用竹葉盛菜去油 ○硼砂 一錢放在炭上燒枯

二は、鹿兒島の島津氏久幸公の嫡男が、欠唇の手術を受けたことを伝える部分である。久幸公は佐志領主で、実は知覧領主久達（ヒサミチ）の三男であったが、佐志領主久東（ヒサハル）の養子となった。この久幸の長子は清久と称したが、疾があつて家督を継がなかつた。欠唇のためであらう。二男の久金が跡を継いだ。

三は、實際の手術についての具体的事項を記しているもので、医学的にはさほど重要でない。

3

黄会友の「神仙秘法」の発見は、この方面での研究を大きく進展させるものと確信しているが、麻醉薬の処方が見出されない理由についても言及したい。

徳明から医術を学んだ伊佐敷道与は琉球に赴く前、つま

り貞享三年（一六八六）上洛して上原道悦に医術を学んだ。
元禄二年（一六八九）二月琉球に渡り、同四年（一六八七）
秋に鹿児島に帰った。翌五年（一六八八）再度上洛して、
北尾芳庵法師に医学を学んでいる。

このことから徳明から学んだ医術の概要については、道
与の口から直接京都の医師にも伝えられた可能性も否定す
ることは出来ない。

（弘前大学医学部麻酔科）

赤穂義士を支援した元赤穂藩医・ 寺井玄溪

木 下 勤

寺井玄溪は、赤穂義士から列外の同志として信頼された
元赤穂藩医である。父祖は三河の武士で父の代までは本多
出雲守政利に仕え、主家改易により浪人となった。玄溪は
京都へ出て町医を開業、その経歴などは不詳であるが桐庵
と号した。元禄十三年赤穂藩の筆頭藩医として、藩主内匠
頭長矩に仕えた。時既に七十九歳。赤穂藩が何故にこの老
医を召抱えたか、その経緯についても不明である。前任者
の口分田玄瑞は長矩の持病・痞（浅野家ではこれを御痞じみきと
いった）を治すには玄溪が最適任であると考えて推挙した
故であるかと推測される。

元禄十四年三月十四日江戸城松之大廊下において長矩が
吉良上野介へ刃傷に及ぶという事件が起きた。事件当日も
薬湯を進めた玄溪は、人一倍自責の念にかられ、急ぎ赤穂